W. B. Yeatsの‘Stare’s Nest by My Window’を読む

―リフレインを中心に―

佐久間　思　帆

〔抄　録〕

W. B. Yeatsはリフレインを見事に活用した詩人として知られている。イェイツのリフレインを分析した研究は多く見られるが、不思議なことに、‘Stare’s Nest by My Window’でのリフレインを取り上げた研究はほとんどない。

そこで本小論はリフレインに焦点を当て‘Stare’s Nest by My Window’の解釈を試みようと思う。

結論としては、リフレインに内包される意味が、繰り返されるごとに変化をし、詩全体に多重的な意味を付加するものとして機能していることがわかった。

なお本小論は、日本イェイツ協会第39回大会でのワークショップ「『塔』をめぐる２篇の詩を読む」で発表した内容の一部を大幅に加筆したものである。

キーワード　W. B. Yeats、“Stare’s Nest by My Window”、リフレイン

はじめに

1922年、アイルランド自由国が成立。英国の植民地支配から脱し、平和と繁栄が訪れるかと思われていた。しかし北部６州（現北アイルランド）の帰属をめぐり、アイルランド内部で対立が発生、同じ民族同士が血を流し合う内戦へと発展した（翌1923年まで続く）。W.B Yeats（1865-1939）の住む、アイルランド西部の町ゴールウェイも戦火に巻き込まれた。そのような状況で作られたのが、今回取り上げる‘Stare’s Nest by My Window’（1922）(1) である。このときの状況をイェイツは次のように言っている。

I was in my Galway house during the first months of civil war, the railway bridges blown down up and the roads blocked with stones and trees. For the first week there were no newspapers, no reliable news, we did not know who had won nor who had lost, and even after newspapers come, one never knew what was happening on the other side of the hill or of the line of trees. Ford cars passed the house from time to time with coffins standing upon and between the seats, and sometimes at night we heard an explosion, and once by day saw

> the smoke made by burning a great neighboring house . . . One felt an overmastering desire not to grow unhappy or embittered, not to lose all sense of the beauty of nature. A stare (our West of Ireland name for a starling) had built in a hole beside my window and I made these verses out of the feeling of the moment . . . Presently a strange thing happened. I began to smell honey in places where honey could not be, at the end of a stone passage or at some windy turn of the rod, and it came always with certain thoughts.(2)

要約すると、「イェイツ自身、内乱で何が起きているのかわからないなかで、死体が運ばれるのを目撃したり、爆発音を聞き、その煙を目撃したりして、恐怖を感じていた。椋鳥が窓際の壁の穴に巣を作ったのを見て、その時の感情から詩を作った。そして蜜の香りがするはずのない場所で、その香りを嗅いだのだ。そのような時はいつもある考えが浮かんだ」ということになる。イェイツが恐怖に直面している様子や、詩作の動機をうかがい知ることができる。

さて、'Stare's Nest by My Window'を評して、Harold Bloomは次のように言っている。

> The powerful refrain, "Come build in the empty house of the stare," an appeal, passionate despite its irony, that the honey-bees, emblems of creativity, come again to the "closed in" poet who cries now : "My wall is loosening." (3)

「『椋鳥ノ空キ家ニ来テ巣ヲ作ッテクレ』という力強いリフレインは、創造性の象徴である蜜蜂に、『我が壁が緩んでいる』と嘆く、閉じ込められた詩人のもとへ再びやってきてくれ、という懇願である」ということである。だが、「力強いリフレイン」とは、どのように力強いのであろうか。確かに、同じ語句を繰り返すリフレインは、繰り返されるたびに強調されて力強さが増すが、同時に単調さも増す。したがってリフレインを繰り返すことは、単調さに陥る危険を犯してのことであり、そこにはなにかしらの強い意図があるはずである。だからこそ、「再びやってきてくれ」という懇願の繰り返しであり、単に力強さを演出する効果を狙ったものであるということだけではなく、イェイツの工夫が隠れているものと考える。そこで本小論は、'Stare's Nest by My Window'ではあまり触れられることのなかったリフレインに焦点を当て、本作品の全体像を考え直そうという試みである。

I

第一連は意味がよくわからない、曖昧で漠然としたものである。詳しくみてみよう。

> The bees build in the crevices

Of loosening masonry, and there
The mother birds bring grubs and flies.
My wall is loosening; honey-bees,
Come build in the empty house of the stare.

蜜蜂は緩んでいる石壁の割れ目に
巣を作る。そしてそこに
母鳥が地虫や羽虫を運ぶ。
我が壁が緩んでいる。蜜蜂よ、
椋鳥ノ空キ家ニ来テ巣ヲ作ッテクレ。

「蜜蜂が巣を作り、そこに椋鳥の母鳥が餌を運んでいるが、椋鳥の巣は空家だから、蜜蜂にやって来てもらい、巣を作って欲しい」と読める。しかし、なぜ蜜蜂の巣に母鳥が餌を運ぶのだろうか。だが空家というのは椋鳥の巣のことなので、空家に母鳥が餌を運んでいたということになる。では、蜜蜂の巣と椋鳥の巣は同じものなのか、別のものなのか。読者は完全に混乱してしまう。前に引用したイェイツの言葉によると、実際には、石壁の割れ目に椋鳥の巣が存在していて、蜜蜂の巣は存在していなかった。

この２つの巣の関係を複雑にしている原因は、冒頭から３行は現在時制が使われていることによる。現在時制は、現在の状態を表すということが一番に思い起こされるが、ここではそうではなく、椋鳥、蜜蜂の習性を説明しているものであると考えられる。つまり、蜜蜂は割れ目に巣を作るものだし、椋鳥も割れ目に巣を作り、餌を運ぶものだ、ということを言っているのではなかろうか。

この習性の説明の後、イェイツは我が石壁、つまりイェイツが住むバリリー塔の壁の割れ目が、緩み、広がっているという現実を目撃し、リフレインで「椋鳥ノ空キ家ニ来テ巣ヲ作ッテクレ」と蜜蜂に懇願するのである。ひび割れが広がっているし、そこに巣を営んでいた椋鳥もいない、だからひび割れを埋めるべく、蜜蜂を呼んで巣を作らせるということであろうか。では、なぜ元の住人である椋鳥ではなく、蜜蜂が呼ばれているのか。それはブルームが言うように、蜜蜂は創造性の象徴であり、また蜂は、壊れた巣を元通りに作り直す習性があるということから、緩み広がりつつある壁を修繕して欲しいと、密蜂に懇願しているのである。

ここでもう一点気がつくことがある。この詩の題では椋鳥の巣を“stare’s nest”と言っているが、リフレインでは“the empty house of the stare”を「椋鳥の空き家」と言っている。“house”を用いることで椋鳥を擬人化しているのであろうか。いやそれだけでなく、“stare”は“stair”「階段」と同音である。つまり、「椋鳥」と「階段」をかけた地口ではないだろうか。イェイツは文字だけでなく、音でも楽しませるように詩を作ることが広く知られており、音が重要な役

割を担っている。ここでは、「椋鳥」を“starling”と綴らず、わざわざ西アイルランド方言である“stare”を使っている。イェイツが常に椋鳥をあらわす言葉として“stare”を用いていたのであれば、ただの深読みであるが、他の作品では「椋鳥」として“starling”、”stare”両方を使っており、どちらかに使用を統一していたわけではなく、使い分けていたものと考えられる(4)。したがって意図的に“stare”を使用し、「椋鳥」と「階段」の２重の意味を持たせていたのではないだろうか。そう解釈すると“the empty house of the stare”は「階段の空き家」となる。すなわち螺旋階段が張り巡らされた、イェイツの住むバリリー塔を暗示していることに気がつく。「椋鳥ノ空キ家ニ来テ巣ヲ作ッテクレ」というリフレインが「階段の空き家に来て巣を作ってくれ」と、巣の中に巣を作るという、抽象的な意味よりも、より具体的な意味となる。つまり石壁が緩み、割れ目が広がりゆくことに詩人は嘆き、創造性の象徴であり、巣を元通りに修理する習性を持つ蜜蜂に、「塔を修理してくれ」と祈っているとも考えることができるのではないだろうか。

Ⅱ

次に第２連であるが、アイルランド内戦について、言及が始まる。

We are closed in, and the key is turned
On our uncertainty; somewhere
A man is killed, or a house burned,
Yet no clear fact to be discerned:
Come build in the empty house of the stare.

我々は閉じ込められ、そして不確さの上に
鍵が回される。どこかで
人が殺され、家が焼かれる。
だがはっきりとした事実はわからない。
椋鳥ノ空キ家ニ来テ巣ヲ作ッテクレ。

イェイツ達はどこに閉じ込められているのだろうか。もちろんバリリー塔であるが、明記されていないため、閉じ込められている場所について、読者の想像をたくましくさせる。この場所には、自ら閉じこもったのではなく、閉じ込められたのである。では何によって閉じ込められたのであろうか。それは内乱によって「人が殺され、家が焼かれる」という恐怖により、閉じ込められているのである。しかし閉じ込められることによって、塔の外で何が起こっているのか、事件の発生現場を目撃することはできず、また情報ももたらされることがなく、「はっき

りとした事実はわからない」状態に陥ってしまったのである。多くのアイルランド人が内乱により、苦しみ、死の恐怖に直接的に対峙しているのに対して、イェイツ自身は、この苦しみ、恐怖を直接知ることはできず、社会的に孤立してしまっている。社会からも閉じ込められてしまったと言える。直接体感できない恐怖ほど怖いものはない。イェイツへの精神的不安は極限にまで達していたであろう。しかし社会的に阻害されているため、「不確さの上に鍵が回され」てしまい、不安が解消されないまま、緊張が続くのである。

このあとリフレインに入る。自分は閉じ込められていて外に出ることは出来ないし、情報も持ってはいない。そこで「椋鳥ノ空キ家ニ来テ巣ヲ作ッテクレ」と祈る。“empty house of stare”は「情報が空っぽの階段の家」すなわち、バリリー塔を象徴している。では誰に（何に）懇願しているのか。ここで、第１連にはあった、「蜜蜂よ」（“honey-bees”）という呼びかけがなくなっていることに気がつく。第１連、第４連にはリフレインに先立って、この呼びかけがあり、蜜蜂に対して発せられた懇願であることが表明されている。しかし、第２連、第３連では呼びかけがないため、必ずしも蜜蜂に対して発せられた懇願ではないと考えることができる。第１連からの流れで、素直に考えれば、蜜蜂に対して発せられたものであり、「空を自由に飛びまわれる蜜蜂に、塔の外では何が起こっているのか教えてもらいたい。ぜひとも塔に巣を作ってもらい、外の社会と塔を結ぶ存在になって欲しい」と求めていると解釈できる。しかし、空を飛び回れることに重きを置くならば、蜜蜂である必要もなく、元々は椋鳥の巣であったことから、そこに蜜蜂が巣を作るというよりは、椋鳥が帰ってきて再び巣を作る方が自然である。そこで椋鳥への懇願、「戻ってきて再び巣を営んでくれ」とも考えることもできる。さらに連想して、鳥が行き交うよりも、やはり人間に尋ねてきて欲しいはずであるから、人間に発せられたものとする。「誰か、椋鳥の空き家にきて巣を作ってくれ。もちろん「椋鳥の空き家」とは「階段の家」のことである。」しかし、人間が巣を作るのはおかしい。では、「巣を作る」という意味で使われている場合の“build”は自動詞の用法であるが、他動詞用法であって、目的語が省略されているものであると考え、“build relationships”「関係を築いてくれ」とすることができないか。つまり「誰か、情報が空っぽの階段の家に来て関係を築いてくれないか」という祈りになるのではないか。「蜜蜂よ」という呼びかけがないため、誰でも、何でもいいから願いを聞いて欲しいという、緊迫した不安、恐怖が伝わってくるのである。

Ⅲ

A barricade of stone or of wood;
Some fourteen days of civil war;
Last night they trundled down the road
That dead young soldier in his blood:

Come build in the empty house of the stare.

石や木のバリケード。
おおよそ14日目の内戦。
昨晩、やつらは血まみれのあの若い兵士の死体を
運び道路を下っていった。
椋鳥ノ空キ家ニ来テ巣ヲ作ッテクレ。

第３連では、初めて“civil war”「内戦」という語句が使われている。このことから、何が起きているのか、イェイツ自身が理解し始めていることがわかる。これまでは、漠然と「人が殺され、家が焼かれる」という真偽のわからない情報だけであったものが、「石や木のバリケード」という具体的なものがイェイツの周りにも配され、いよいよ恐怖が形となって迫ってきた。そして決定的なもの、つまり「血まみれの若い兵士の死体」をイェイツ自身が直接目の当たりにして、「死」を実感する。第３連は、具体的な描写のみが書かれている。特に１、２行目は、名詞が並べられているだけである。思索をする余裕さえ奪われてしまっているのであろう。

このような危機の中、リフレインでは何を意味しているのであろうか。もはや目前に危機が迫っている以上、抽象的な懇願ではなく、具体的な懇願のはずである。では検討してみよう。この連も「蜜蜂よ」という呼びかけはない。やはり「誰でも、何でもいいから、頼む」という感じであろう。そして文字通り読めば、「椋鳥ノ空キ家ニ来テ巣ヲ作ッテクレ」と象徴的な懇願であるが、“build”を他動詞とし、目的語が省略されていると考えれば、具体的な懇願になる。“build barricades”とすれば、目前の暴力を防ぐべく、「バリケードを立ててくれ」となる。“the empty house of the stare”は「バリリー塔」となり、「バリリー塔の中にバリケードを立ててくれ」と懇願しているのである。建物の中にバリケードを立てるのは、常識的には考えられないが、所構わずといった危機感が感じられる。

次に、“build a grave stone”として考えてみよう。「若い兵士」の死を悼み、「墓石を建ててくれ」と哀悼の祈りを捧げていることになる。では“the empty house of the stare”は何を象徴しているのか。内戦では若者たちが血を流し死んでいく。アイルランドから若者たちが居なくなり“empty”になっていく。すなわち、アイルランドを象徴しているのである。「アイルランドに若者たちの墓石を建ててくれ」とのイェイツの切実な祈りになるのである。

Ⅳ

We had fed the heart on fantasies,
The heart's grown brutal from the fare;

More substance in our enmities
Than in our love; O honey-bees,
Come build in the empty house of the stare.

我々は空想で心を養ってきた。
心はその食べ物のせいで残忍になった。
我々の愛の中よりも、憎しみの中に
養分があるのだ。ああ蜜蜂よ、
椋鳥ノ空キ家ニ来テ巣ヲ作ッテクレ。

第４連では再び抽象的な瞑想に戻るが、これまでの第１連から第３連までを受けて、内戦に対するイェイツの憂いを表明しているものと捉えることができる。アイルランドは民族一丸となり、過酷な独立闘争をしてきた。イェイツは文芸復興運動の指導的立場になり、民族意識を鼓舞していた。イェイツがそのように意図しなかったこととは言え、戯曲*Cathleen ni Houlihan*（1902）が、その内容ゆえ若者たちを武力闘争へと駆り立てる一要因となり、多くの血が流れた。「我々は空想で心を養ってきた。心はその食べ物のせいで残忍になった」とはこのことを暗示しているのではないか。血を流すことに慣れてしまった心は残忍になり、独立が達成された後も、憎しみの対象を英国から、同じ民族に代え、血で血を洗う、無益な内戦を繰り広げていることを嘆き、自分が行った行動に自身がもてなく、不安になっていたのではないだろうか。

ではリフレインで何を祈っているのか。“O honey-bees”「ああ蜜蜂よ」と、再び蜜蜂に懇願をする。“the empty house of the stare”をアイルランドとみなせば、第１連で蜜蜂に「塔を元通りに修理してくれ」と懇願したのと同様に、「アイルランドを元通りに戻してくれ」つまり、「同じ民族同士が憎しみ合わない平和なアイルランドに戻してくれ」と懇願していると捉えることができる。

次に“the empty house of the stare”をバリリー塔としてみよう。バリリー塔は、イェイツの精神を象徴するものであるということは、広く知られている。ここでは、イェイツ自身が行ってきた活動への自信が揺らいでいることと、精神の象徴である塔の石壁が緩み、ひび割れていることを重ねていると考える。すなわち、「塔の石壁と同じように揺らぐイェイツ自身の芸術家としての自信を、元通りに直してくれ」と懇願しているようにも解釈できる。つまり第４連は、第１連から第３連までと結びつき、平和への祈りと、自分自身の芸術への迷いを表明しているのである。

おわりに

本小論では、'Stare's Nest by My Window'を、リフレインは単に同じ言葉を繰り返すだけのものである、という先入観を取り除いて考察してきた。リフレインは、繰り返されるごとに、詩本体と呼応して、内包されている意味が変容してゆく。それだけでなく、リフレインには多重に意味が重ねられていて、今度は逆に、詩本体を意味的に深めているのである。イェイツはリフレイン使いの名手であるということは有名であるが、特にこの詩におけるリフレインの効果はすばらしいと思う。同じ言葉を繰り返すたびに強くなる祈りと、その反面、繰り返されるがために変化する祈りの含意は、イェイツの心の揺れ、不安を見事に表現しているのではないだろうか。

〔注〕

(1)　本論中のテキストはDaniel Albright編集の*The poems* (Londn: Dent, 1990) を使用。

(2)　W. B. Yeats, *Autobiographies* (London: Macmillan, 1955) 579-580

(3)　Harold Bloom, Yeats (New York: Oxford University Press, 1972) 354

(4)　イェイツ全詩作品中、椋鳥は2作品、この詩と*The Wanderings of Oisin*のみである。*The Wanderings of Oisin*では椋鳥を"staling"と綴っていることから、特にどちらかに統一していたわけではないことがわかる。A. N. Parrish, ed., *A Concordance to the Poems of W. B. Yeats* (Ithaca: Cornell University Press, 1963) を参照。

（さくま　しほ　　文学研究科英米文学専攻博士後期課程）
（指導：加藤　芳慶　教授）

2004年10月15日受理